

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□〜□で、十八ページにわたって印刷してあります。
ページが抜けるなどしていた場合には、試験監督の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

次の①～⑩の——線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 三年の年月を経て現場に復帰する。
- ② 家屋が倒壊とうかいしたらしいとの報を受ける。
- ③ ただちに地域住民の安否を確認する。
- ④ 他の隊員と必死の形相で救助に向かう。
- ⑤ 災害に備える心構えを忘れなかった。
- ⑥ 幹線道路のカクチヨウ工事に着手する。
- ⑦ カンシユウに捕らわれない大胆だいたんな計画だ。
- ⑧ 有能な技術者がこの事業にサンカクする。
- ⑨ 工事を請け負う業者をシユシヤ選択する。
- ⑩ 事業終了までのテンカイを注視したい。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

五年の十一月になつてすぐ、緒方先生に呼ばれた。

「北川、今度の地区大会のことだがな」

前に立つと、薄青のトレーナーの胸が広い。被さってくるような大きさだ。

「おまえ、一〇〇〇メートルやめて、ハードルに変われ」

「ええ、嫌です」

① 後ずさろうとする足を止め、ふんばり、先生を見上げた。

「うん」

緒方先生の首が少し揺れる。先生は、遠子から視線を逸らさなかった。

I 「北川が一生懸命、走り込んだのは、知ってる。けどな、記録がちよつと伸び悩んでるだろ。ここは思いきつてハードルに

切り替えたほうがいいんだ。いや前から北川をどう使うか悩んでいたんじゃない。

これ以上あんまり伸びないような気がしてな。北川は、足長いし、^(注1)瞬発力がある。ハードル向きやと思う。

ルに出場する選手がおらんし、ええチャンスだろ。長距離ばっかしじゃのうて、自分の可能性にチャレンジしてみいや。大会

まで時間ないしな。競技種目を変えるんなら、今がぎりぎりなんだがな」

薄青のトレーナーが、一歩近づくと、

緒方先生の笑顔が近づく。

^aの **A**

言つて、おまえの一〇〇〇の記録、

B ハード

遠子は、つばを飲み込んだ。

「うち、嫌です」

緒方先生の口元が引き縮まる。

Ⅱ「北川、この記録表見てみい。先々月から、全然、記録が伸びてない。

C

落ちてる。いや、そんな時期もあるんだ

が、ちよつと不調が長すぎる。このままでは、一番不調なまま記録会と、ぶつかってしまふぞ。それならいっそ、ハードルに変わったほうが、おまえの瞬発力を生かせるぞ。なつ、先生には、わかるとるんだ」

②先生には、わかっている。ほんとうに、わかっている。西日を背にうけて、先生は、大きな彫像(注2)のように見えた。遠子は、

黙だまって頷うなずいた。

その日から、雨が降らないかぎり、毎日ハードルと向かいあつた。

ハードルでは、周りの景色けしきは消えない。自分だけの息や汗あせを感じることは、できなかつた。

「ええな、ハードルをまたぎこすりズムをつかむんじゃ。それと、高く跳とび上がるな。振り上げた足をまっすぐ伸ばして、ぎりぎり上を跳はぶ」

緒方先生の指示を身体で覚えるのに必死だつた。

必死になつた分、記録は、どんどん上向いていった。

「うん、また、縮まつた。調子ええぞ」

ストップウォッチを見せて、緒方先生が笑う。

「なつ、先生の言うたとおりだろ。北川は、ハードルに向いとるんじゃ」

「はい」

③返事してから、遠子も笑おうとした。笑えない。まだ、ハードルが怖こわかつた。

「なんか、ハードルって意地悪こわみたいに感じる」

練習の後、暗くなつた運動場で愛子に言つてみた。

愛子は、声をたてて笑つた。

「トコちゃん、おもしろいこと言うな。それって、苦手意識でやつじやろ。いっぱい練習したらだいじようぶじや。側そばで見とつたらフォームなんか、すごいきれいじやで」

「練習か」

「そうそう努力、努力。うちもリレーのアンカーになつたし、一〇〇も走るし、がんばるつもり」

遠子は、お正月も練習を休まなかつた。

元旦がたん、初詣はつもちがすむとすぐ、校庭にやつてきた。用具室にカギがかかつていたので、ハードルは出せなかつた。走り込みと柔軟体操じゆうなんを一時間ほど、一人①でこなした。

二日目。学校へきてみるとハードルが並んでいた。緒方先生が、やあと手をあげた。そばに愛子もいてVサインバイを出している。

「いやあ、今朝けさ、ぐうぜん北川のお母さんに出会つてな、昼から練習に行くと思つたもんだから。北川がこんなに熱心ねっしんに練習してるのに④顧問こもんのワタクシメがぼけつと正月しとるわけにはいかんじやろ」

「トコちゃん、練習するんだつたら、うちも呼んでよね。先生に教えてもらわんかつたら、こつちこそぼけつとしてお正月、すごすところだつたが」

「あほやな、平田は。おれに教えてもらわんでも、北川みたいに自主的に練習しようと思ついたらよかつたんだぞ」

「先生、かわいい生徒をつかまえて、あほとはなんですか」

愛子あいこがこぶしを握にぎつて、振り上げる。

「わわっ、怖いな。よし、そのまま手を振つて、準備体操じゆんびだ。その後、ランニング。始め」

運動場うんどうじやうを駆け足かで回りながら、愛子が耳元みみもとで囁ささやいた。

「ねえトコちゃん、緒方ってわりがいいところあるよね」^④

「えっ、いいところって？」

「だって、お正月じゃ。こんな時まで練習に付き合ってくれるんじゃないから、いいところあるが」

あつ、そうかと思った。

休みを返上してまで、付き合ってくれる先生なんて、そういるもんじゃない。

確かにそうだ。

なのに、少し息苦しかった。

準備体操、ランニング、ハードル練習、ストレッチ。

今日は、緒方先生の言うままに練習をこなしていかなければならない。

真冬にしては、暖かな光の中で、白と黒に色分けされたハードルは妙によそよそしく、気取った大人のように見えた。

三学期に入ってから、遠子の記録は少しずつ縮まっていった。

「ええぞ、北川。もう少しで去年の大会記録に並ぶぞ。大会まで日がないからな、ダッシュ、ダッシュ」

ダッシュ、ダッシュと緒方先生の声が背中を押す^お。こんなじゃないと思う。記録、成績、何分何秒。数字に追いついたら

れて、苦しくて……。走るのって、こんなじゃないと思う。^⑤

大会が終われば、すぐにハードルをやめるつもりだった。ハードルをやめて、なんにも縛られずに、自分のために走り

たい。大会が待ちどおしかった。^⑥

ところが、記録会の種目から突然ハードルが除かれてしまった。

「先週、隣町で事故があったやろ。ハードルに足ひっかけた、転んだ中学生が、大けがしたやつ。もし、小学生の大会で、

続けて事故があったら困ることになったらしい。しょうがない、北川は、また一〇〇〇にもどれ。まったく、あれだけ

練習したのに、残念やったな」

早口に説明する緒方先生の前で、遠子は棒のように立っていた。

しょうがない。残念やった。先生、そんな言葉ですんでしまいませんか。そんなん許されるんですか。

握ったこぶしの内側で汗が滲む。そのこぶしで殴りつけたかった。先生の心臓のあたりを思いつきり殴ったら、どんな音がするだろう。下唇を強く噛む。口の中に、血の臭いが広がった。

「先生、ずるい」

愛子の声でした。いつのまにか、白いハチマキをしめた愛子が立っていた。

「先生、トコちゃん、あんなに練習しよったのに、かわいそうじゃが」

「そう責めてくれるな。先生じゃてつらいんじゃ。けどな、競技種目を決めるのは、ぼくらじゃないからな、どうにもならんのじゃ。理由が理由だけに、どうしてもハードルをしてくれとは言えんしな。北川、ほんまに悪かったな。おい、平田、そんな怖い顔するなや。まるで節分の鬼みたいになつとるぞ」

「もう、失礼な。なあ、トコちゃん」

遠子は、相槌を **D** ことができなかつた。

「北川も、そんなにふてくされるな。やれるとこまで一〇〇〇メートルでやってみよう。なっ」

遠子は顔をあげ、瞬きました。

ふてくされてなんかいなかった。そんなんじゃなかつた。拗ねてふてくされた後、しょうがない、残念やったと諦めてしまえるようなことじゃない。

遠子は、ハードルにちゃんとけりを **E** たかつた。勝てなくてもよかつた。ただ、今までやってきたことをこんな形で無駄にされたくない。

「先生、うち、絶対嫌です」

そう言おうとした。こぶしを強く握り締め、遠子が口を開けるより前に、緒方先生は胸をそらして「ともかく、この話は

ここまでにしよう」と言った。

「なっ、なにをやったって無駄なことは、ないんだ。今までの練習は、一〇〇〇でも役に立つんだぞ。さっ練習、練習。二人ともそんなぶすつとしとつたら、嫁よめに行けなくなるぞ」

先生は遠子の顔を見ない。愛子の背中に手をあてて、軽く前に押し出しただけだった。

「べーだ、先生なんか知らんよ」

愛子が、くくつと笑う。遠子は、こぶしを開いてみた。手のひらに、爪つめのあとが三つ、細い三日月の形で残っていた。

(あさのあつこ『あかね色の風』)

(注1) 瞬発力…とっさに反応して出せる筋肉の力。

(注2) 彫像…彫刻して作った像。

(注3) フォーム…スポーツをしているときの姿勢。

(注4) 顧問…部活動などで生徒に助言したり指導したりする役目の人。

問一 〓線a「伸び悩んでる」・b「こなした」の意味として最も適当なものをそれぞれ後の中から選び、記号で答えなさい。

a 伸び悩んでる

- ア 伸びないことに思い苦しんでいる
- イ 伸びそうでいながら伸びずにいる
- ウ 伸びてはいるがほんの少しである
- エ 伸びる気配がまったく見られない

b こなした

- ア こっそりやってみた
- イ いやいや取り組んだ
- ウ いろいろと工夫した
- エ 最後までやりとげた

問二

A

C

に入る語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア まったく イ もしも ウ ちょうど エ まさか オ むしろ カ なおさら キ はつきり

問三

——線①「後ずさろうとする足を止め、ふんばり、先生を見上げた」とありますが、この時の遠子の心情を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どうかすると圧倒あつとうされそうになる自分の気持ちを奮ふるい立たせ、先生の命令に抵抗ていこうしようとしている。
イ かねてから信頼している先生の申し出に逆らう気はないが、なかなか踏ん切りふみぎりがつかないでいる。
ウ いきなり先生に言われたことなので納得なっとくすることができず、きちんとした説明を求めようとしている。
エ いったんは先生の提案ていあんを受け入れたが、本当にそれでいいのか自信が持てないまま思い悩んでいる。

問四

I「北川が」とII「北川、」の先生の二つのセリフを比較ひかくし、それを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア Iのセリフによって、遠子の種目変更へんごうに関しては十分説明されつくした感はあるが、それでも言い足りないことをIIで補足し、IとIIとを合わせることによって完全なものになっている。

イ I・IIともに遠子には決定権がないことを暗に示しているが、Iはなるべく遠子が前向きな気持ちになれるように褒めほめるが、IIは遠子の短所だけを指摘してきして、決めつけた言い方になっている。

ウ Iのセリフに比べて、IIのセリフは短くなっている。Iでは、遠子を説得しようと言葉をつくして説明しているが、遠子に反対されたことで嫌気いやけがさし、IIになると、投げやりな言い方になっている。

エ I・IIともに発言の内容は変わらないが、Iは方言を交えた親しみのある言い方であるのに対して、IIは断定的な表現を多用し、有無うむを言わせず従わせようとする意志を感じさせる言い方になっている。

問五 — 線②「先生には、わかってる」とありますが、先生には何がわかっているのでしょうか。本文から読み取り、「～こと。」につながるようにして答えなさい。

問六 — 線③「遠子も笑おうとした。笑えない」とありますが、この時の遠子の心情を説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ここで笑顔を見せてしまったのは、自分の言うことに間違いまちがはないと信じ込んでいる先生のためにはならない。
- イ 自分の素質がハードルに向いていることは前から感じてはいたが、やはり先生の言うことには従いたくない。
- ウ 自分のハードルの記録を見る限り、先生の言うとおりでだとは思っているものの、やはりハードルを好きになれはしない。
- エ 練習での記録には満足できるものの、本来の自分の目標である大会優勝のためにはここで安心してはならない。

問七 — 線④「いいところあるよね」とありますが、ここで言う先生のいいところを、「～ところ。」につながるようにして二十字以内で答えなさい。

問八 — 線⑤「走るのって、こんなじゃない」とありますが、遠子は走ることを、どのようなものとしてとらえているのでしょうか。本文から読み取り、「～もの。」につながるようにして答えなさい。

問九 — 線⑥「大会が待ちどおしかった」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大会が終わったら、自分の好きな競技に打ち込むためにハードルをやめるつもりだったから。
- イ ハードルが大会から除かれたことで、自分の好きな一〇〇メートル走に戻って出場できるから。
- ウ 大会が終わってしまえば、あれやこれやと命令ばかりする先生と一緒に練習しなくてもよくなるから。
- エ 嫌いだとは言え自分なりに努力してきたハードルなので、その力を思う存分発揮してみたいと思ったから。

問十

D

E

に入る語句として最も適当なものをそれぞれ次の

の中から選び、適当な形に直して答えなさい。

たたく

入れる

つける

返す

倒す

打つ

もどす

問十一

— 線⑦「こんな形で無駄にされたくない」とありますが、「こんな形」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 参加する選手を差し置いて、大人たちによって勝手にハードルが大会から除かれたこと。
- イ 実際に自分の素質がハードルに向いているのかどうか、分からないままになってしまうこと。
- ウ せっかくハードルの本当の面白さに気づいたのに、また新たな種目に取り組まねばならないこと。
- エ ここまでハードルを頑張ったのに、その成果を確かめることさえできずに大会が終わってしまうこと。

問十二

——線⑧「手のひらに、爪のあとが三つ、細い三日月の形で残っていた」とありますが、それを見ている遠子の心情を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 選手のことを少しも理解しようとせず、自分の意見に従わせようとする先生のもとでは、自分の理想とする陸上競技の楽しさは味わえないことが分かり、これを機会にもう陸上競技はやめてしまおうと考えている。

イ 一〇〇〇メートルを種目変更したことや気持ちを切り替^かえて取り組んだハードルが大会から除外されたこと、またそれらに対して自分がどのように思っているかをきちんと伝えられなかったことが悔^くしくて腹立たしいと感じている。

ウ ハードルが大会から除外されてしまったことは残念だが、これまでがんばってきた努力は決して無駄にならないと信じ、この悔しさをバネにして今度こそ一〇〇〇メートルの大会で成果を発揮しようと思気込んでいる。

エ ハードルが大会から除外されたうえに、一〇〇〇メートルに戻れと突然告げられ、先生の言うとおりにした方がよいのか、それともここまで練習してきたハードルを続けるべきなのか、自分の中で答えが見つからないでいる。

三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「自然を大切に」とか「地球にやさしくしよう」とかの口あたり①のいい標語が流行り出して久しいが、地球にやさしくしなくとも、自然を大切にしなくとも、地球や自然は別に何も困らない。現在のところ、人類は自然の生態系に依存して生きている。第三章で述べたように、生態系は生産者、消費者、分解者で構成され、人間は消費者の一員に過ぎない。だから、人間が生態系を人間が生存できないほどに改変してしまえば、人類は絶滅してしまい、後に残った生物たちがそれなりの生態系を構成し、進化していくことになる。地球の中に人間抜き②の新しい自然ができるわけで、別に地球が壊れるわけではない。人間が生存できないほど自然環境を改変してはいけないというのは、自然のためなんかではなく人類が生き延びるためにはそうせざるを得ないからに決まっている。

しかし、こういう当然の考えが出現したのは一九世紀になってからで、それまでの人々はそんなことは考えなかった。自然の力は人間の力に比べてあまりにも強大で、人類が自然の機能まで変えられるなどと考えることすらできなかったのである。しかし、二〇世紀の半ばを過ぎる頃③までは、人間の科学技術力は自然生態系を人為的に改変することができ、強力になり、ここに A という思想がはつきりと出現してきた。

しかし、イデオロギー④はいつの時代でも過激な分派を生み出す。自然を保護するのは人間のためでなく、自然そのものに価値があるためだと考える人たちが現れる。この人たちは自然物にも生存権を与えよ、と主張している。たとえば、加藤尚武は次のように書いている。

「そこで人間だけでなく、自然物そのものに生存の権利があるのではないかという議論が巻き起こった。奴隷に権利を与え、女性に権利を与え、労働者に権利を与え、黒人に権利を与えてきた人間は、今や種や、生態系や、資源や、景色にも生存の権利を認めるべきだという主張が出てきた。

もちろん、そんなことをすれば、牛を食べられない、ダイヤモンドを掘り出せないということになるから、人間は生きて

いけないという反対論がある。……(中略)

自然物に生存権を与えよという主張は、一つの小麦も、一匹びきの牛を食うなという主張ではない。種を人為的な絶滅から守れ、人間の恣意的恣意的な自然利用を止めよという主張である。生命あるものに等しい生存権を与えよという主張なのであって、人間以外の生物に人間以上の権利を与えて絶対化することを主張しているのではない。

人間は遊びや贅沢ぜいたくをするために動物を殺害している。たんなる好奇心こうきしんや、趣味しゆみのために生命のある自然物を破壊はかいして利用することは自然に対する犯罪である。人間が生存に必要である以上に自然破壊をする権利は正当化できない」(『環境倫理学のすすめ』)

奴隷に権利を与え、女性に権利を与える延長線上の話として自然物にも権利を与えるべき、というのはあまりにも乱暴な話である。人間はとりあえず特別だと考えなければ仕方がない。人間中心主義(注6)からの脱却だつきゃくなどとかっこいいことを言ってみても、それを考えているのはその人の脳である。だから、これは脳中心主義の一種であろう。自然物にも生存権があるなどと考えているのは人間だけで、自然物はそんなことを考えたりしない。

しかし、一見かっこよく見えるこういった意見の最大の問題は、人間の生存のためなら牛や小麦を食べてもよいが、趣味や贅沢(注7)のためには殺してはいけない、というトンチンカンな考えにある。人間の生存と遊びや趣味や贅沢が区別できるとの考えほど傲慢な思想はないと私は思う。牛など食ったことのないアフリカやアジアの最貧民ひんみんからみれば、西洋人は趣味か贅沢で牛を食っているに違ちがいがないからだ。一万数千年前の狩猟採集生活しゆりようをしていた先祖に比べれば、ほとんどすべての現代人は贅沢ざんまいの暮らしをしているに決まっている。そしてその贅沢ざんまいの暮らしを生存のための必要最小限の条件だと考えているに違ちがいない。

『人は生き延びるためにのみ生きていくわけではない。人生に何らかの楽しみを見出し生きていくのだ。たとえば家庭菜園で野菜を作っている人がいる。害虫の蝶ちようが飛んできて卵を産み付け、いも虫がいっぱい発生する。ある人は、見つけ次第いも虫を潰つぶし、ある人は農薬を撒まいていも虫を殺し、ある人はいも虫に野菜を食べ放題にさせておくだろう。いも虫を殺し

でも殺さなくとも人間の生存には何の影響えいぎょうもない。みんな趣味でやっているのだ。いも虫を殺さない人はほめられて、いも虫を殺す人は非難されるべきだろうか。決してそんなことはないbと私は思う。

いも虫を殺すのも生かすのも、家庭菜園を作っている個々人の勝手なのである。虫食いの痕あとのないきれいな野菜を食べたい人もいるし、虫は嫌きらいだけれども自分で殺すのはいやな人もいるだろうし、虫食いの野菜でも平気な人もいるし、なんであれ殺生せつしょうはいやという人もいる。どれを選んでも別に大した問題ではない。いも虫の個体に生存権などあろうはずがない。農家の人は、害虫を殺さなければ暮らしていけないから、いも虫を殺してもいいが、家庭菜園をやっている人は趣味でやっているのだから殺してはいけない、なんてバカな話はないのだ。』

ウシやブタは殺して食ってもよいが、クジラは食ってはいけないなんてアホな事を言う人もいる。その理由は、ウシやブタは人間が食べるために飼育している家畜かちくだから、殺しても食べても自然保護に反しないが、クジラは野生動物だから、殺すのは自然保護に反するからだ、という。しかし、これはおかしい理屈りくつである。人間はウシを飼うために牧場を作る。牧場は自然の生態系を改変して作ったに決まっている。そこで以前生きていたたくさんの野生生物たちは永久に生息地を奪うばわれたに違いない。直接、手を下さなかったにしてもたくさんの野生動物たちは **B** 的に大殺戮だいざつりくされたのである。

これに対して、クジラを食う行為は、一見クジラを直接殺すので残酷ざんくなように見える。しかし、クジラの生息環境を破壊しているわけではない。いっぺんにある種のクジラの個体群の半分も捕とってしまうのは確かに問題だと思うが、回復可能な範囲はんい内で捕って食べるのは別に何の問題もない。むしろ、自然に対する侵襲しんしゅうという観点からは牧場を作る方が罪が重い。私は別に牧場を作るのが悪いと言っているわけではなく、ウシを食うよりクジラを食う方が悪いという意見は根拠こんきょがないと言いたいだけだ。

自然物に生存権があるという考えは端的たんてきに間違っている。我々は回復可能な範囲内で自由に自然物を利用してよいのである。生存のためか遊びのためかにかかわらず、野生動植物の命をもらってかまわないのだ。ただし、イデオロギーのために動植物を殺すのだけはやめた方がよいと思う。私が外来種駆除くじよに反対するのは、この一点に抵触ていしよくするからだ。

それでは自然保護はしなくてよいのか。もちろん、した方がよいに決まっている。 **C**、その理由は自然のためではなくて人間のためだ。

D、人間がある生物種を絶滅させてしまったとする。すると、この生物を利用することは永久にできなくなってしまう。これは、この生物を利用できるかもしれない現在及び未来の人の権利を侵害することになる。

E、種を絶滅させるのは避けるべきだ。それは種だけではなく生態系についても言える。重要なのは、目的によって自然の利用に価値付けをすることなく、^⑥持続可能な利用なのだ。

(池田清彦『環境問題のウソ』)

(注1) 生態系…ある地域の生物とそれをとりまく環境をひとまとまりのものとしてとらえたもの。

(注2) 人為的…自然のままではなく、人の手が加わるさま。

(注3) イデオロギー…政治・社会的な思想。

(注4) 分派…もとの勢力から分かれたもの。

(注5) 恣意的…思うままにふるまうさま。

(注6) 脱却…よくない状態からぬけ出すこと。

(注7) 傲慢…えらそうにして人を見下すさま。

(注8) 侵襲…無断で入りこんで危害を加えること。

(注9) 端的…はっきりしているさま。

(注10) 外来種駆除…外国から入ってきた生物種を追い出したり殺したりすること。

(注11) 抵触…してはいけないことをすること。

問一 — 線①「□あたりのいい標語」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どこかで聞いたことがあるような決まり文句
- イ 読む人の心にうったえかける表現をした文章
- ウ 読む人に好印象を与えるような主張をした語句
- エ 誰だれもが分かるように易しく言い表した言い回し

問二 — 線②「そうせざるを得ない」を言いかえたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然環境を守らなければならない。
- イ 自然環境を改変するしかない。
- ウ 自然を利用するのは当然のことだ。
- エ 自然は破壊しないほうがよい。

問三

A

 に入る漢字四字の語句を本文中から探して答えなさい。

問四 — 線③「人間以外の生物に人間以上の権利を与えて絶対化すること」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然は偉大いだいな存在であって、人間の力などは取るに足りないものでしかないということ。
- イ たとえ人間が生きていくためであっても、自然の利用は許されるものではないということ。
- ウ 人間も自然に含まれるふくことから、人間と自然を対等な存在として考えるべきだということ。
- エ 同じ生物である以上、自然物が人間と同等の権利を持つことは今後実現すべきだということ。

問五 ー線④「トンチンカンな考え」とありますが、「トンチンカン」だとする理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「生存のため」であろうと「趣味、贅沢のため」であろうと、自然を破壊していることには変わらず、同じレベルの環境破壊行為であるから。

イ 本来比べることなどできないはずの「自然」と「人間」とを比較しながら、どちらの存在を大切に扱うべきかなどを延々と論じているから。

ウ 一万数千年前の先祖の狩猟採集生活と現代人の文明的な生活と、時代の差を超えて比べることなどどう考えてもできるはずがないから。

エ 自然を破壊する理由において、「生存のため」と「趣味、贅沢のため」との区別に明確な基準がなく、人によってとらえ方が異なるから。

問六 『 』の部分にある「農家の人」と「家庭菜園をやっている人」との違いを、筆者はどのようにとらえているでしょうか。「野菜」「いも虫」という語句を用いて説明しなさい。

問七 ー線①～④の中で、語句の働きが他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問八 **B** に入る語句を漢字二字で答えなさい。

問九 — 線⑤「ウシを食うよりクジラを食う方が悪いという意見」とありますが、この意見のもととなる理由が示されている一文を本文中から探し、最初の五字で答えなさい。

問十

C

E

に入る語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア だから イ しかも ウ たとえば エ あるいは オ また カ しかし

問十一

— 線⑥「持続可能な利用」とはどういうことでしょうか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人類がたどる未来を予測し、正しい利用目的を明確にしたうえで自然を利用し続けること。
- イ 生物種を絶滅させたりせず、人間がこの先ずっと自然物を利用していけるようにすること。
- ウ 自然を利用することがいいのかわからないのを、これから先も常に考え議論し続けていくこと。
- エ この先ずっと人間が自然物を利用していくために、種によって絶滅することも仕方ないということ。